

## 山に親しみ山に想う(20)

### －韓国俗離山国立公園 紀行－

<文・写真> 岡本

2002年10月、開天節(韓国の建国記念日)の祭日3日と4日にかけて1泊2日で慶尚北道と忠清北道の道境にある俗離山国立公園を歩いた。法住寺から俗離山文蔵台(注)に登り、尚州市化北面に降って帰京した。

3日朝8時過ぎに家をでる。地下鉄二村駅で4号線に乗り、舎堂駅で2号線に乗換え、9時10分に東ソウルバス ターミナル駅に着く。ターミナルでキツネうどん(3500ウオン)を掻き込み、9時30分発の俗離山行き長距離バス(11600ウオン)に乗る。満席である。全員が俗離山行きというわけではなく、清州や報恩行きの乗客が多い。途中、清州辺りから一般バスのようになり幾ヶ所も停車して行く。12時55分に俗離山バス停終点に着く。約3時間半の所要時間。終点バス停に着くや、待ち受けるように宿屋の客引きおばさんが新羅荘に泊まれと声を掛けてくる。値段を尋ねると、2.5万ウオンという。「ふーん」と返事すると、さらに追っかけてきて2.0万ウオンに値引きするという。時間はまだ午後1時だし、登山口近くに宿を取ったほうが便利なので、おばさんに関わらず、今日中に法住寺見学を済ませるために寺に向かう。大通りの両側は、土産物店、食堂(主に郷土料理)、裏通りには民泊、旅館、モーテル、ホテルさらにはナイトクラブの看板も見える。世俗化も甚だしい。

土産物店が途切れた先、俗離橋のたもとに案内板があり、法住寺1.9km、俗離山文蔵台7.7kmとある。その先にある入山切符売場の料金は、3200ウオン(国立公園入園料1300ウオン、文化財(法住寺)観覧料1900ウオン)と他の国立公園より割高(一般に2600ウオン)になっていた。法住寺だけを訪れる人も3200ウオンであり、参拝に来た人は「高いなあ」と漏らしていた。ここら辺りから文蔵台に至る地域は法住寺の寺域のようである。「湖西第一伽藍」の扁額が懸かる南大門を潜る(湖西は忠清南北道の称)。無蓋の大仏(統一護国金銅弥勒大仏)はテカテカの金色であるが、五重塔は重厚な趣があり立派である。金堂は修復中。法住寺は、西暦559年(新羅真興王14年)に義信祖師が統一を祈願して建立したが、壬辰倭乱(文禄の役のこと)で焼失し、李氏朝鮮仁祖23年(1625年)に再建された由で国宝3点が所蔵されている。小学生の団体が遠足で来ている。バス停からも近くて交通の便が良いこともあって訪問者は多い。午後2時20分頃寺をでた。

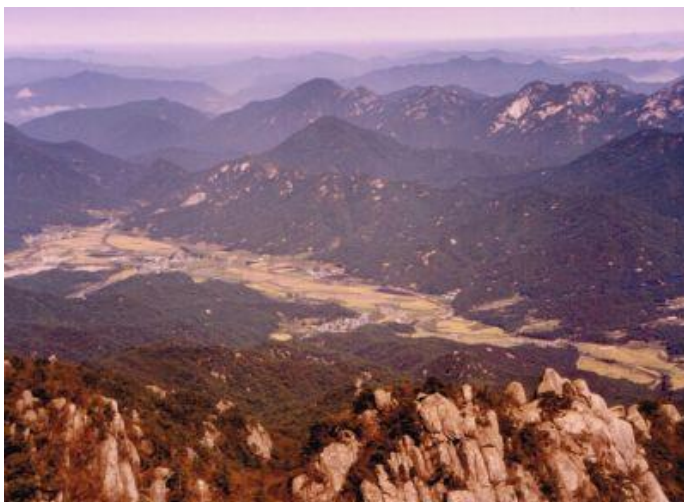


約30年前釜山勤務当時(1970年代)に、大田市からタクシー(車種はノックダウン輸出されたトヨタコロナ)で法住寺に来たことがある。タクシーはオンボロで足元の床から砂埃が入ってきて往生した覚えがある。法住寺の建物自体はよく覚えていないが、大仏は金色ではなくセメントのようであったと思う。



入山切符売場から近いところのソンリントウン旅館に宿をとった。2万ウオンの前払い。風呂、テレビありで、タオルは貸してくれる。やはり建物は安普請。布団にはタップリ香水が散布。小白山国立公園内の民泊の2.5万ウオンと比べれば、大満足。夕食は近くの食堂でピビンバップ(6000ウオン)を食べたが、蠅が箸にまで止まってくるので嫌になり残した。売店でポカリ、ロールケーキ、チョコレートなど明日のカロリー源とフィルム2本を買った。ソウルでは2500ウオンのフィルムが3000ウオンだ。風呂に湯を張ったがぬる過ぎ、風邪を引くかもしれないので止め、テレビを見てそのまま寝た。持参した「ローマ人の物語(1)」を読了した。

翌4日は6時50分に宿を出た。朝食はロールケーキ2個と賞味期限切れのポカリ。地方の田舎でポカリなどの飲料や菓子を買う際は、賞味期限をよく調べないと期限切れが多い。食堂で他人の歯型がついたものに出くわすことに比べれば、期限切れなどとやかく言うべきことでもないか。7時に入山切符売場を通り、7時10分に法住寺に着く。寺門から文蔵台まで5.9kmである。肌寒く、冬の装備が必要だ。蓮池の水面には朝靄が立つ。案内板のある三叉路で右の文蔵台(4.1km)へ、溪流をみながら穏やかな道を進む。7時50分頃から漸く登り道となる。登りからすぐにある洗心亭休憩所(ベンチを置いた売店)の三叉路で左に道を取る。その先に「湖西 第一禅院」の扁額の懸かるポックチョン庵がある。文蔵台まで2.5km地点のヨンパウイ休憩所に着く。ここからチョット登山道らしい道となる。この後、頂上までに更に2箇所の休憩所がある。休憩所のおばさんが「寄って休んでください。他の一行の方は後から来られますの」と誘う。「いや、一人」と素気無い返事を返す。何か飲み物を買ってあげようかと思うが、賞味期限切れのポカリがリュックにある。



9時45分に文蔵台(1033m)頂上に着いた。頂上近くに若干の急坂があったが、緊張するようなところはなく、登山道というよりハイキングコースと言うべきである。休憩所の売店は道の途中に多く、また頂上にもあって過当競争気味である。文蔵台の山名は、雲の中に佇む山ということから雲蔵台と呼ばれていたが、李氏朝鮮の世祖がここで詩を吟じたことから文蔵台と称されるようになったと言う。3回登れば極楽にいけるとも言う。頂上は10m四方の岩

の台地で鉄の階段が設けられている。手摺に寄りかかると、岩頭から身を乗り出すような感覚にとらわれて、足がすくむ。頂から遠くの山波を撮っていると、「撮ってあげる」と青年に



声を掛けられた。名古屋に3年住んでいたという。では日本語は上手なんだろうと尋ねると、挨拶程度だと韓国語で答えてきた。従業員100人程の会社の研修旅行できているという。

下の方で、その会社の連中が「団結だ」とシュプレヒコールを叫んでいる。元気があって頼もしいのだが、傍若無人。他の登山者への迷惑を考えず、頂上への道を占拠し塞いでいる。陽は燦々。頂上の岩に座りポカ리를飲む。天界に浮かんでいるような自分を感じて気分は爽快だ。遠くに重畳たる岩稜が威圧し、下にキャラメル程の家屋が集落をなして穏やかである。南方向に毘盧峰(1032m)と最高峰の天王峰(1057m)が岩稜の先近くに聳え、南西方向に法住寺を抱え込むように山峡が望見できる。



1時間ほど頂上に居て、10時40分に法住寺とは反対側の尚州市化北面の方向に降る。文蔵台と化北管理事務所間は、3.3kmである。こちらの道は登山コースらしく幅1m程で土、岩、礫の変化のある登山道である。危険なところはなく、登山者にとって大人しく温順である。ソウル市街近くの北漢山国立公園内のコースを思わせる。下から中学生の団体、中年のグループが登ってくる。

12時半頃、化北管理事務所に着く。その近くにある入山切符販売所でバス停の場所を尋ねたところ、少し行った所の化北市場(露店朝市か)にあると言う。舗装された地方道をドンドン30分以上歩いても、集落は出てこない。途中、深さ20~30cmで底が岩盤と砂の溪流に、小魚が群れて遊泳しているのを見つけた。心が和んで、ふと振り返ると峰の陰に隠れていた俗離山の稜線がクッキリと見える。山では振り返ると予想外の景観が現れることがある。裸足になって沢に入って歩くと、岩底はヌルヌルで砂地では土踏まずに快い刺激が伝わる。揃って頭を上流に向けている小魚の群れが、指図されたかのように瞬時に滑るように川下に流されては、流れに抗して上流に反転する。魚影が底に点々と映っている。

道草の後、チャンアン里の標識がある立派な舗装道路の分岐に着く。「刺身の店」というレストラン前で地元の老人に化北市場のバス停を尋ねると、「ここから右にずうっと行かないとバス停はないよ」との返事。「少し行く」と「ずうっと行く」を聞き間違えたか。それはあり得ない。遠くに小学生1年生くらいの子供が6人程学校から帰っていくのが見える。その後方に壁の塗装も新しい校舎が見える。周囲の手入れもよく、ビニールハウスもある。農協倉庫前の小型トラックをみても農産物の流通も良好で、農事は堅実に営まれているのが見て取れる。



「ずうっと」歩いた末に、やっと化北面事務所に着く。その先の交番所に寄って、若い巡査にバス停の場所と尚州市街方面へのバス時刻を尋ねた。バス時刻は知らないが、バス停は交番の前にあると言う。確かに雨除けの板囲いがあり、椅子もある。しかし、バス停とも書いてないし、時刻表も何もない。現在 2 時。バス停向かいの日陰を作っている木の下に座って、どこ行きのバスであろうと止まったバスに乗ることにした。40 分後、尚州市街行きが来た

ので乗車。バスひとつ乗るのに、これほど苦労するとは。停留所に時刻表がないことを異常とは思わず、地元の人々もこれを不便とも思わないのだろうか。

4 時に尚州市のターミナル(1200 ウオン)に着き、4 時半発の東ソウル行きバス(15000 ウオン)に乗り換え、8 時 10 分に東ソウルに着いた。ターミナル横のコンビニでコーヒー(500 ウオン)を飲み、腹の底から安堵の息を吐いた。韓国の登山体験というよりも、ソウルと地方の文化的格差という観点からは、貴重な体験ができた。

(注)

俗離山(ソンニサン)：韓国中部地方の忠清北道 報恩郡、キ(人偏に鬼)山郡、慶尚北道尚州市にまたがって存在する天王峰(1057.3m)、文蔵台(1033m)、毘盧峰(1032m)、観音峰(985m)などを含む九峰の山塊の総称、紅葉の名所で韓国八景の一景。

(了)